

## 11【街の散策からの気づき発見】

### 三上於菟吉顕彰碑と春日部高校

会員 K.T.

柳村・知世子夫妻の句碑の反対側に三上於菟吉の顕彰碑がある。顕彰とは、広く世間に知らせ表彰すること。三上於菟吉が春日部高校（旧制柏壁中学校）のOBであることから、令和3年(2021)、於菟吉生誕130年を記念し、「三上於菟吉顕彰会」と「春日部高校同窓会」が建てた、との説明がある。

三上於菟吉(1891~1944)は、大正から昭和初期の大衆小説家として著名な人だが、知らない人は、多いと思う。私も平成29年(2017)7月の春日部郷土資料館で、第57夏季展示『初代直木賞選考委員 三上於菟吉を知っていますか?』の展示イベントで、於菟吉のことを知った一人だ。於菟吉は大正から昭和初期に多くの作品を残している。代表作としては何度も映画化された「雪之丞変化」がある。

於菟吉と直木賞の関係は、直木三十五(本名・植村宗一)が早稲田大学での於菟吉の一年後輩にあたり、親交があったことによる。植村宗一は、大正後期から昭和初期にかけて、大衆文芸作家、評論家として活躍した。ペンネームは本名の「植」を分解し、直木とし、年齢を名前として執筆を始め、「三十一」で始まり、「三十五」までは、毎年改名した。しかし、菊池寛から「いい加減に筆名を変えるのはやめろ」と注意され、「三十五」で落着いた、といわれている。直木は、昭和9年(1934)の2月に43歳で病没する。直木の死を悼んだ菊池寛や作家仲間、編集者達により、昭和10年(1935)に大衆賞「直木三十五賞(通称直木賞)」が設けられた。於菟吉は直木賞の選考委員を初回から第16回まで年2回、8年間務めた。現在も直木賞は文学界の権威ある賞として続いている。

さて、春日部郷土資料館の展示資料を元に、小説家、三上於菟吉の略歴を咀嚼して、説明すると、「於菟吉は、明治24年(1891)埼玉県中葛飾郡桜井村の木崎(現春日部市木崎)で漢方医の三男として生まれた。明治44年(1911)早稲田大学英文科予科へ進学、同級に宇野浩二(うのこうじ・後に小説家)、廣津和郎(ひろつかずお・後に小説家)、1級下に植村宗一(直木三十五)がいた。明治45年(1912)、大学の同級生らとともに雑誌『しれえね』を創刊するが、於菟吉の作品が元で風紀上の理由から発禁処分となった。於菟吉は父により、大学を1年で中退させられ、大正3年(1914)までの2年ほど、実家で謹慎させられた。大正4年(1915)再び上京し、初めての著書『春光の下に』を自費出版し、当時既に劇作家として著名だった長谷川時雨に献本した。於菟吉の処女作『春光の下に』は、政治的内容を含んでいたとされ、まもなく発禁処分を受けた。時雨への献本が縁で、二人の交際が始まり、大正5年(1916)ごろには同居して事実上の夫婦となった。

無名時代の於菟吉は、時雨に支えられて、翻訳などを手掛けた。時雨は於菟吉の文才を評価し、於菟吉を売れっ子作家へ育てていく。やがて、於菟吉は純文学から大衆文学へと転じ、成功していく。大正13年(1924)『時事新報』に連載された現代もの小説『白鬼』が好評を博した。大正14年(1925)から『週刊朝日』に連載された時代物小説『敵討日月双紙』は大好評で、於菟吉は大衆作家としての名声が固まった。昭和9年(1934)朝日新聞で連載された「雪之丞変化」は評判を呼び、何度も映画や舞台で上演された。「雪之丞変化」の大ヒットによって、於菟吉は作家として絶頂期を迎えた。しかし、昭和11年(1936)に自動車事故により右腕を負傷した後、病気がちとなり、昭和15年(1940)に血栓症で倒れ、右半身不随となった。この時期、妻の時雨は軍隊への慰問活動を続けながら、於菟吉を献身的に看護していたが、昭和16年に病氣で急逝した。

時雨に先立たれ、創作活動も衰えた於菟吉は、昭和18年(1943) 東京から郷里の春日部、北葛飾郡幸松村八丁目(現春日部市八丁目)に疎開する。翌19年(1944)血栓症の悪化により、53歳で生涯を閉じた。」、ざつとこんなところだ。個人的には於菟吉の妻、劇作家・小説家で、また女性だけの雑誌『女人芸術』を主宰し、昭和初期の時代に「女性文筆の公器たらん」とした時雨(本名・長谷川ヤス)の凜とした生きざまの方に惹かれる。今回の街散策は、「顕彰碑」を発見し、思わぬ歴史の記憶がよみがえった。

